

八月から二十三年九月まで）ポストーシニシャフトカ
ンパニー（東鉱山派遣駐在作業中隊）として人員増強
して現地に移住し、坑内セクションのほかに地上作業
セクションも増設され、日本ドクター（バルハシ本隊
から軍医と衛生兵を派遣した）も常駐し医療を担当し
たので、医療、健康衛生面は面目を一新した。

当時は顧みると、今申した第一次期間が最も労働面
でも保安衛生面でも過酷辛惨を極めた時期でありまし
た。常駐のドクトルなく病院設備もなく、ただ働くだ
けの、生産を高めるだけの安全を無視したものでした。
もちろん厚生文化面などは何もなかった。事故被災し
た部下メンバー諸氏は、いずれかに搬送され、消息を
断っております。

また第二次期間に入ってから、被災数は減つても、
やはり事故発生は絶えず、コマンダーの知らぬ間に搬
送処理された被災者は少なからずあると思つている。

人間が自分の私物も自由もすべてを奪われ、精神と
肉体両面で明日をも知れぬ極限状態に至ったとき、一
体何を求めるか。

「日本に帰りたい、おれを残して行かないでくれ、
一緒に連れて帰ってくれ：：」と叫んだ妻子ある病兵
の声。

「おふくろのつくったばたもちを食つて死にたいな
あ」と石の下敷きになつて切り羽を血に染めた若い独
身兵。それらは何を言わんとしているのか、その心の
うちを読み取れるような気がする。

そして、そのことが今のような平和な時代に、物の
あふれた自由な時代において、「人間が一番大切にす
べきものは何か。」を考える上でのよい教訓になると
思います。

忘れ去ることのないシベリア抑留

新潟県 高野 広一

人は思い出に生きるといふが、この言葉が痛切に身
にしみるほど年輪を重ねてしまった。人それぞれいろ
いろな思い出があると思うが、私にとつては生涯忘れ

去ることのできない思い出の一つが「戦後におけるシベリア抑留」の体験であろう。

昭和十八年、歩兵第二十九連隊会津若松に召集を受け入隊。昭和二十年八月十五日の終戦は旧満州国四平街で知った。そして八月二十九日武装解除、九月十日第二十四作業大隊と名づけられた組織の中に編入され、九月十六日四平街を出発した。目的地も何も知らされずただ黙々として歩き、汽車に乗せられ、大河黒龍江を渡り、ついにソビエト国に上陸した。

船に乗る際、満州から運んできた多くの食糧、衣服その他を積み込んだが、日本に帰るといふ言葉を信じ、いや信じたかったためか、何らの疑いもなくソ連に足を踏み入れた。そしてシベリア鉄道に乗せられてしまった。人間が大地に立った視野では全く東西南北の方向がわからない。有蓋貨物列車に乗せられ汽車は動き出した。だれかが叫んだ「おい、西の方向に走っているぞ」と、途端に列車の中はざわめき始めた。ウラジオストックから日本海を渡って日本に帰るものとはかり思っていた矢先のこと、気持ちは動転し不安がつの

ってきた。貨車の中で一夜が明け始めたころ、カラスの大群の鳴き声が聞こえてきた。だれ彼となくカラスは不吉である。カラスの鳴き声が悪いとか、おれたちは遠くシベリアの果てで集団銃殺されるのではないか、次から次へと、不安材料はつるばかりであった。不安にかられながらも何日目の日か記憶にないが、貨車の高窓から外を眺めていただれかが突然「海が見えるぞ」と歓喜の声で叫んだ。やっぱり日本に帰れるんだ。汽車は西ではなく東に向かつて走っていたんだとまたみんながざわめきだした。人はだれでもそうだと思うが、ちよつとでも条件が悪いと悪い方向にものを考え、わずかでも自分の望みに合う条件があるとよい方向に解釈したいものだ。日本に帰るには海を越えなければならぬことはだれでも知っている。従って海が見えるということは日本海しかないと思っていたが、その発想も瞬時にして泡沫のように消えてしまった。シベリア鉄道はまぎれもなく西に向かつて走っていた。海に見えたのは世界最大の湖、バイカル湖であった。シベリア鉄道はバイカル湖の近くを走っている。

窓から見た湖は進行方向の右手に見えたから西に向かつて走っていることが現実に確認された。今度はその不安は現実化してきた。不安を乗せたまま汽車はさらに西へ西へと走り続けた。そして長い長い汽車の旅は終わり、ソ連が計画した目的地カザフ共和国カラカンダに到着したのは秋も深まった十一月二十日のことだった。

道中いろいろのことがあったが、一番困ったのは停車中にシベリアの大陸からわき出ている井戸水を飲んだこと。大陸の生水は絶対飲むなといわれていたにもかかわらず、のどの渇きを潤すためか空腹にたえかねたか、意志の弱さでついに生水を口にしたのが災して、腹の中が空になるかと思われるほど、下痢が続いた。ところがカラカンダに着いて夕食に久しぶりに白い米の飯（だれかが密かに隠し持っていた米）を食べさせてもらったら不思議に治った。「生きて虜囚の辱しめを受けることなかれ」と戦陣訓にあったが、まさか抑留の身になるとは夢にだに思ったことはないのに、いつの間にか有刺鉄線の中に入れられ、収容所の見張り

楼の上にはマンドリン銃（自動小銃）を持ったソ連兵が監視している。監禁同様で一步も外へ出ることは許されない。まさにまもないたの鯉のようなものだ。貨物車の中で夢に描いていた日本帰還はただのはかない夢であった。

シベリアの冬は早い、肌を刺すような寒さの中作業命令が出る。馬の餌のような食べ物で給与は悪い。コウリヤンあるいはヒエ、アワなどのかゆが飯盒のふたに八分目と目玉が映るスープが飯盒に半分くらいが朝食であった。それとスプーンに一杯の砂糖が配給された。昼食用に三百グラムの黒パン（最初は酸っぱくて味もない）一切れが同時に支給されたが、大事な昼食のため、小さな手製の布袋に入れ腰にぶら下げて作業に出た。防寒外套を着ての作業。やる気のない作業は当然能率は上がらない。ソ連もこれを見てノルマ（作業量）を割り当ててきた。ノルマ一〇〇%以上に達したとき定量の三百五十グラム、八〇%以上なら三百グラム、六〇%以上なら二百五十グラムと、作業能率は翌日のパンに影響した。これには困った。ブラブラし

てはいられない。無理して明日の餌のために働く。栄養失調患者が出る。凍傷患者が出る。作業どころではない。死亡者が出る。死亡者を凍土の中に葬るため幾つかの穴を掘った。衣服は脱がされ、ふんどし一本だけで凍土の中に埋められていった。

だれに知らせることもなく、一人また一人と姿を消していった哀れな戦争犠牲者に、改めて心からご冥福をお祈りする。

コルホーズの監視作業についたある夜（コルホーズの監視とは集団農場で夕方から朝までの間、畑作物をとりに来る者を監視する仕事で、中には大勢でトラックでとりに来る者もいる）一人の中年女が羊の股を二本持つて来てジャガイモかキャベツと交換してくれといったが、監視する我々をさらに監視するソ連の兵隊が、馬に乗り自動小銃を肩にして見回りに来る。そのすきを見てジャガイモと交換してやった。羊の股は早速飯盒で煮て肉はその場で食べ、残った油は間もなく固まってバッテリーのようになったので、飯盒に入れて何食わぬ顔で収容所に持ち帰り、みな一緒に黒パンにつ

けて脂肪分の補給として二、三日はもった。いいことばかりはない。ある朝、収容所に帰って夕方から高熱に冒されて、左の腕がはれ、肩のつけ根から指先まではれて痛み始めた。氷のような冷たい水の中に腕を冷やしたり四苦八苦したが、治る様子もないので戦友がソ連の軍医に申し出てくれた。早速ソ連の軍医の診察を受けた。最初、前腕のところに小豆くらいの黒い斑点がそのときは十円玉くらいの大きさになっていた。ソ連の軍医はそれを見て、腕全般が化膿しているので紫色になった十円玉くらいのところをえぐりとって中のうみを出すという。覚悟はしたものの手術は麻酔薬も使わず、しかも紫色の腐った部分の外側の生身のところをメスとハサミで切り始めた。痛いというより強烈な電流が走るような感じであったと同時に、頭の中は真つ白く不本意ながらも後ろの方にひっくり返ってしまった。あれから四十数年、いまだに時折その傷痕がうづくのを感じる。

収容所の生活はほかにいろいろあるが、酷寒の地で過酷な労働、肉体的不遇のみでなく、それより以上

に精神的圧迫によるもの、ソ連の不法な行為に対する反感が強かったのではないだろうか。記憶は一生、記録は末代までというが、収容所から出したはがきが四通、今手元にあるがソ連から出したこのはがきは末代までの証となろう。

終わりに、心温まる思い出として、ダモイが決定したとき、コルホーズに行く途中に一軒の家があつて、顔見知りの老婆と娘に、日本に帰ることを告げに立ち寄った。老婆と娘は「ヤポンスキー、トウキョウダモイ、ハラシヨウ」日本に帰るのか、よかつたね、と言つて手を差し伸べ、目には涙さえ浮かべていた。そして別れ際に一切れのパンをくれて「ドスベダーニャ」さようなら、と言つてくれたこと。国は異なり言葉は違つても、人の情は変わらないものだと思つづく感じだ。今ごろ、老婆と娘はどこにどうしているのか、健在ならもう一度会つてみたい。

シベリア（外蒙）抑留の記

和歌山県 前澤 勇

八月十六日、我々は中ソ国境近くで、八路軍討伐に熱河省編成の直轄隊の無線要員として出勤していた。夜になって通信用の無線機で東京放送を聞いたところ「日本は米英の無条件降伏の申し出に対し、受け入れの態勢にある」とだけ聞き取れたが、またどこかで敵国が周波数を盗んでデマ放送をしていると心にもとめなかつたが、夜中過ぎて省公署の討伐隊本部から「停戦協定が成立したからすぐに引き揚げてこい」と有線電話が入った。

停戦協定ならそうアワを食つて行動することもなからうと、それでも各中隊に引き揚げ命令を出し、私らの大隊本部員は二台のトラックに乗つて省の所在地、承德に向け出発した。途中中国側ではすでにソ蒙軍の進駐を予測していたのか、道路は戦車壕で寸断され、